資料6

緊急地震速報の利活用状況について

気象庁が内閣府と共同で行ったアンケート結果によれば、岩手・宮城内陸地震時の緊急地震速報は「揺れる前あるいは揺れている途中の行動に利用（すなわち警報としての利用）」、若しくは「揺れが収まった後の行動に利用したと思われるもの（すなわち地震情報として利用」されたものに大別されることから、以下のとおり整理した。

1．警報として利用（揺れる前あるいは揺れている途中の行動に利用）

- 工場内に避難放送が流れ避難（工場、宮城県大衡村）
- 大きな揺れが来る前に身構えることができた（事業所、宮城県仙台市）
- 非常口等のドアを開放した（老人ホーム、秋田県大館市）
- エレベータは予定通り機能した（商業ビル、仙台市）
- 館内放送により周知した（集客施設、福島県玉川村）
- 倉庫構内へ自動放送し、注意喚起ができた（事業所、宮城県仙台市）
- 車を運転中であったので速度を落として左側に寄せて停止（運転中、岩手県滝沢村）
- 緊急地震速報後、直ちに施設外へ避難し、安全な場所に移動した（幼稚園、宮城県角田市）
- 窓を開け、落下物の心配のないところに移動した（中学校、宮城県南三陸町）

（以上、アンケート結果として報道発表済み）

2．地震情報として利用（揺れが収まった後の行動に利用したと思われるもの）

- 速報とほぼ同時の揺れであったが、情報収集や余震情報入手に活用した。
- 詳細な震度が判明するまで列車の運行を見合わせた。
- すぐに、校長および学校近辺に住んでいる職員に連絡した。
- 災害対応支援のための出勤に利用できた。
- 地震発生後、テレビの情報により対応の仕方が判断できた。
- 発生場所、規模等について確認でき、その後の行動の判断ができた。
- 休日ではあったが（たまたま学校に居たので）、建物やコンピュータの点検にすぐ対応できた。
- 校舎、校地内の被害状況の把握。
- 学校の施設の点検等を迅速にできた。
- 職場に行き、安全確認を行った。
- 道路状況等確認後、学校に集合し、対応できた。
- （本震発生後テレビをつけたままにしていたので）余震が発生するのを予見することで（余震による緊急地震速報は発表された際は）、各自が身の安全を確保することができた。
- 余震に備える人員体制に利活用できた。

3．その他（教訓、心構えなど）

- 今後、（テレビやラジオの）電源を入れる習慣をつけたい。